

阪市交通局から、京都市電からは1900形。そしてU3プロジェクト、「ULTIMATE(アルティメイト)究極の+URBAN(アーバン)都会的+USER FRIENDLY(ユーザーフレンドリー)お客様にやさしい」として開発された5100形グリーンムーバーマックス。この5100形は超低床車両として開発されましたので、車いすでの乗り降りも、とってもスムーズです。

さて、広島駅前を出発した路面電車は駅前大通りをさけるように一旦東へ向かい、信号一つ越えれば、まずは猿猴橋町の電停へ。電停と言いましても幅90センチ程のコンクリートブロックが車道と道路中央の軌道の間にあるだけで、屋根もなく雨の日は電車を待つのが危険なくらいの電停です。「広島駅南口広場の再整備等に係る基本方針」が決定しましたので、近い将来、路面電車のルートが変わり、この猿猴橋町電停はなくなることになりそうです。それから、しばらく行くと荒神三叉路、ここで大きく右にカーブした後、荒神橋を渡り猿猴川を越えます。橋を渡った所が的場町、ここで左に分岐しているのが皆実線。宇品、広島港へと向かう路線です。この皆実線の比治山橋電停で下車をしますと、私が小学6年の冬まで過ごした町に行くことができます。当時私が住んでいたのは3階建てのアパートだったので、今では15階建てのマンションが立っています。さて本線ですが、的場町を過ぎますと稲荷町、ここで駅前通りと再び交差をいたしました、そのままつづく京橋川に架かる稲荷大橋を越えて、銀山町と書いてかなやまちようへ。この辺りからビルの高さも高くなって都会っぽくなります。ついでに電停と電停の間隔も短くなって、発車したと思ったらすぐ次の電停といった感じになって来ます。急ぐ時には使えないのが広島路面電車です。銀山町を出ますと、路面電車の写真撮影には絶好のポイントである歩道橋をくぐって胡町へ。胡町の左手には流川、葉

研掘と言った広島最大の歓楽街が広がります。胡町から100メートル程で八丁堀。三越、福屋、天満屋と言う3大デパートが有る中心部。ここから南へ徒歩3分の所に有名なお好み村は有ります。この八丁堀から北に分岐している線が白島線。軌道は繋がっているんですが、こだけ独立した路線。区間運賃も130円。さらに市街地を西へ向かうと立町を過ぎ、紙屋町の交差点へ。ここは交差点を挟んで東と西にそれぞれ電停があり、紙屋町東と紙屋町西。この紙屋町の東西の電停は地下街からのアクセスも可能な電停です。ここから南へ向かうのが宇品線、皆実線同様に広島港へ向かう路線です。紙屋町西の次が原爆ドーム前。左手には世界遺産、右手には旧広島市民球場跡地。球場の姿は今なく、空が少し広くなっております。元安川が本川と分かれる所に架かっているのが相生橋。戦前のT字型に復元されたのは35年程前のことです。そして電車は本川町を過ぎ、十日市へ：

男の長話の間に女A、客席を通過って舞台の上に来て
いる。

女A あの：

男 はい？

女A えっと、

男 ああ、ちよっと待っててね。

男は女Aを舞台の隅に連れて行く

男 えっと、何処まで行ってましたっけ？

女C あ、いたいた。(ト、女Aを見つけて)

女D あら本当に。

女C・Dが、Aと同じように客席を通過して現れる。

男 あ、まあ、広島路面電車の旅は又どこかで。

女C だから言ったじゃん。

女D 何を？

女C ほら、色々。

女D 色々ね。

男 あ、こっちこっち。

女C・D、周りを気にしながら舞台の上に向かってきて、所在なさにたたずんでいる。

男 どうかした？

女D いやあ。

女C その〜。

男 何？

女D いや〜。

女C その〜。

女D 何と言うか。

女C 気配と言うか…、

女D 視線と言うか…、

男 うーん、そうねえ。

女C ほら、何か、この辺り。(ト、客席を見回す)

男 難しい質問だ。

女D うん？

男 確かに気にはなっているんだ。そもそも私は誰に話しかけているのか。

女C だよね。

女D うん。

男 そして、先ほどから何やら我々を見つめる視線を、いや、ひよっとすると視線を向けてはいなくとも、意識は我々の

この話し声に向けている。意識の視線のようなものを、感じるんだよね。

女C だよね。

女D うん。

男 しかし、それを意識してしまっただけならダメなんだ、と思う。

女C そうなの？

男 世界に関わる問題だから。

女D うん？

女B ちよっとお。

女B、客席に現れ、舞台に上がってくる。

女C 遅い。どこ行ってたの。

女B ごめん、ごめん。ちよっとトイレ。

女C 何行けば気が済むの。

女B こればかりは。ん、どうかした？

女C 何か感じない？

女B 何を？

女D 視線とか気配とか？

男 だから、ダメなんだって、それを意識するのは。

女D そうなの？

男 いや、確かに適度に意識する方が良いと言う意見も有るのも事実だけど。

女B 何の話？

女C 世界の話。

女D そうそう。

女B 世界？

女C この世界。

男 だから、距離感が大切なんです。そうやってこの小さな世界は成り立っているのですから。

女B はあ。

女C へえー。
女D ふーん。

男 例えば、

女B はあ。

女C へえー。

女D ふーん。

男 聞いている？

女B・C・D、うなずく。

男 例えば、ここを映画館だとする。

男と女B・C・Dは、横一列になって腰掛ける。すると、どこからともなく映画館のような音が聞こえて来る。そこは映画館になる。4人は映画を観ている。

女Bの携帯電話がなる。

女C ちよつとお。

女B あ、ごめん。

女D 電源。

女C 恥ずかしいわあ。

女B だから、ごめんって。

女C まったく。

女B だから、ごめんって言うてるじゃない。

女C ごめんって思っていないでしょ。

女B 何だよ。

女C 別に、何となく。

女D、「おしゃべりもご遠慮下さい」ってさっきスクリーンにでてたでしょ、静かにしなさい。というの

をおしゃべりができないのでゼスチャーで女B・Cに伝える。

女B え何？

女C 何。

女D、もう一度試みようとする。

女B だから何？

女C どうしたの？

女D (辞めて)だから、静かにしなさい。あんたたちだけ

じゃないのよ。

女B あ。

女C ああ。

女D ホント、いいかげんにしなさい。

女B・C ごめんなさい。

男 どう？

女B はあ。

女C へえー。

女D ふーん。

男 じゃあ、例えば、ここを電車の中だとする。

するとそこは電車の車内になる。全員横一列のまま、電車が揺られている。

女Bの携帯電話がなる。

女C ちよつとお。

女B あ、ごめん。

女D 電源。

女C 恥ずかしいわあ。

女B だから、ごめんって。

女C まったく。

女B だから、ごめんって言うてるじゃない。

女C ごめんって思っていないでしょ。

女B 何だよ。

女C 別に、何となく。

女B いや。

女C 何よ。

女B そもそも何で電車の中で携帯使っちゃいけないの？

女C ペースメーカーとかに影響与えるって。

女B それ、昔の携帯でしょ。

女C え、そうなの？

女B なに、知らないの。

女C 知りませんでしたけど、何か？

女B なにそれ、腹立つ。

女C それはそれは、すみませんでした。

女B すまないと思っていないでしょ。

女D ちよつと、静かにしなさい。あんただけじゃないのよ。

女B・C あ。

女D そういうのも含めて、お互いにお互いを思いやるのが

大切なんですよ。

女B・C ごめんなさい。

男 どう？

女B はあ。

女C へえ。

女D ふーん。

男 じゃあ、例えば、ここを美術館だとする。

するとそこは美術館になる。全員立ち上がり、それぞれ、それぞれの美術品を鑑賞している。

女Bの携帯電話がなる。

女C ちよつとお。

女B あ、ごめん。

女D 電源。

女C 恥ずかしいわあ。

女B だから、ごめんって。

女C まったく。

女B だから、ごめんって言うてるじゃない。

女C ごめんって思っていないでしょ。

女B 何だよ。

女C 別に、何となく。

女D ちよつと、静かにしなさい。あんただけじゃないのよ。

女B・C ごめんなさい。

女D ホント、いいかげんにしなさい。

男、女B・C・Dを見る。

男 解った？

女B はあ。

女C へえ。

女D ふーん。

男 世界のこと。

女B はあ。

女C へえ。

女D ふーん。

男 私たちがここを海だとしてしまうと、ここは海になり、

波音や海猫の鳴き声が聞こえてくる。

日差しの強い夏のとある日だとすると、そうにも

女Bの携帯電話がなる。

するとそこは美術館になる。全員立ち上がり、それぞれ、それぞれの美術品を鑑賞している。

女Bの携帯電話がなる。

するとそこは美術館になる。全員立ち上がり、それぞれ、それぞれの美術品を鑑賞している。

女Bの携帯電話がなる。

するとそこは美術館になる。全員立ち上がり、それぞれ、それぞれの美術品を鑑賞している。

女Bの携帯電話がなる。

するとそこは美術館になる。全員立ち上がり、それぞれ、それぞれの美術品を鑑賞している。

なる。

日差しがカツと強くなり、蟬の鳴き声が聞こえる。

男 想像すれば世界は変容する。それがこの世界のルール。

女 B はあ。

女 C へえー。

女 D ふーん。

男 ま、ここでしゃべったり、色々したら、世界を創造できる訳ね。

女 B はあ。

女 C へえー。

女 D ふーん。

男 じゃ。例えば、ここを病院の中だとする。

男、女 B・C・Dと目を合わせる。うなづく、女 B・C・D。

男 こっち、こっち。(ト、女 Aを導き) ここで、横になつて。

女 A え。

男 うんうん。

女 A、横になる。その女 Aを見舞うようにたたずむ

男と女 B・C・D。

女 Bの携帯電話がなる。

女 C ちよっとお。

女 B あ、ごめん。

女 C 恥ずかしいわあ。

女 B だから、ごめんって。

女 C まったく。

女 B だから、ごめんって言ってるじゃない。

女 C ごめんって思っていないでしょ。

女 B 何でよ。

女 C 別に、何となく。

女 D ちよっと、静かにしなさい。おばあちゃん、休んでる

んだから。

女 B・C ごめんなさい。

女 D ホント、いいかげんにしなさい。

4人、女 Aを見る。

女 A おばあちゃん？

女 A、起き上がる。

女 D ほらあ。

女 B ごめんなさい。

女 C いまのは声が…(ト、女 Dを見る)

女 D 何？

女 C ううん、何でも。

女 B おはよ。

女 D 気分はどうです？

女 A うん。

女 C 顔色、随分よくなった。

女 B 良かったあ、おばあちゃん。

女 A え？あたしおばあちゃん？

女 C うん、ホント良かった、おばあちゃん。

女 A えっと？

女 D 一時はどうなるかと思いましたがよ、おばあちゃん。あのお？

女B 良かったあ、おばあちゃん。
女C 本当にね、おばあちゃん。
女D ねえ、おばあちゃん。まあ、私からするとお義母さん

ですけどね。

女B あ、また。

女C いいじゃん、おばあちゃん。

女D いいえ。こういうことはきちんとしてほしいと。

女B・C はいはい。

女D はいは、一つで。

女B・C はい。

女A …おばあちゃん。

女B・C・D うん、うん。

男 ルールですから、世界の。

女A はあ。

女A、あきらめておばあちゃんになる。そして、ゆ
っくり全員の顔を見回し、うなづく。

女C テレビでも点けようか。

女B 何でよ。

女C 別に、何となく。

女D やめなさい、家じゃないんだから。

女B ほらあ。

女C 何よ。

女B・C・Dの携帯がアラート音を鳴らし出す。

女D ちょっと、いい加減にしなさい。

女B いや、さつきちゃんと。

女C あれ、あたしのも。

女D え、あら、私も。

三人、それぞれに携帯の音を切る。

女B ねえ、これって。

女C ちょっと、テレビ。

男 ああ。

男、テレビを点ける。テレビからは、かの国のミサイル発射を伝えるニュースの音が聞こえてくる。

女B これって。

女C うん。

女D この辺りは大丈夫ってこと？

男 みたいだね。

女B びっくりした。

女C だね。

女A そうなの？

女B 大丈夫みたいよ。

女C どっか遠いとこの話みたい。

女B そうそう。

女A 遠い、どこか。

女D もう、いいんじゃない、それ。

男 ああ。

男、チャンネルを変えようリモコンを操作する。
チャンネルが変わり、聞こえてくるのは中東の紛争
のニュース。

女A あ。

男 あ、いや。

男、更にチャンネルを変える。しかし、やはり聞こえて来るのは紛争のニュース。

女D ちよつと。
男 いや。

男、チャンネルを変えるが、どのチャンネルも戦争やテロのニュースばかり聞こえてくる。女D、男からリモコンを奪い取り、テレビを消す。

女A どこもかしこもだねえ。

男 え。ああ。

女D ねえ。

男 いや、これはちよつと予想外。

皆、黙り込んでしまう。重い空気。それを打ち破るように、

女B あたし喉乾いた。

女C あ、あたしも。

女D ああ、売店ってあった？

男 えーと、自販機だったら有ったような気がするけど。

女B コンビニ、一階にあったよ。

女C え、そうなん？

女B うん。

女D 最近は病院の売店がコンビニなのね。

男 へえー。

女C ちよつと行って来て。

女B あたし？

女C のど乾いたんでしょ？

女B あんたもでしょ。

女C あたし、お茶。

女D あたしは水、常温で。

男 あ、じゃあ、ドリップコーヒー、お砂糖一本、入れずに

持って来て。

女B え、え。

女C よろしく。

女D ありがとう。

女B 結局あたし？

女C あったんでしょ、コンビニ。

女B もう。お茶って何茶？

女C 烏龍茶以外ならなんでも。

女B で、お水、(女Dの視線を感じて)常温で。コーヒー

に砂糖を入れずに一つもらってくる。もう、

女Bが立ち上がろうとすると女A、遠くを指差す。

女A ああ。

男 ん？

男、女Aの指し示す方を見る。

男 ああ。

女D 何？

男 うん。飛行機かな？

女D ああ。

全員、遠くの飛行機を見ている。そして、

女B・C・D・男 あ。

女A 何か、落ちて来た。

キーンという高音のノイズ。
男、女Aを導いて舞台の端へ。そこから少し離れた
ところに女B・C・Dが座っている。

男 まあ、こんな感じですよ。

女A は？

男 これからしばらく。

女A そうなんですか。

男 すぐ慣れますよ。

女A あの…。

男 これ、どうぞ。

男、女Aにスリッパを手渡す。

女A どうも。

男 そうそう、ちゃんと紹介しなくては。皆さん、どうも。

ご機嫌いかがですか？えっと、ご紹介いたします。あ、こ
つちに。(ト、女Aを招きよせる) どうぞ、よろしくお願
いします。

女A よろしく、お願いします。

三人の女の視線が女Aに集まる。

女A えーと。

男 はい。

女A ああ、おばあちゃん。

男 いや、それはもう。

女A そうなの？

女D いいですよ。

男 え？

女D おばあちゃんでも。
女A あ、そうですか。

女A、その場で横になろうとする。

男 ホント、それはもう。だから、ほら。

女D いいじゃない。

女B どうぞ。

女A はあ。

女C ここおいで、ここ空いてるから。

女D ああ、そこ。

女A あ、はい。

女D そこに突っ立っていると、テレビが見えない。
女A すいません。えっと、テレビ？

女A、キョロキョロするがリアルなテレビは存在し
ない。

女A どこ？

女D そこ。

女A ええ？

男 ルールですから、世界の。

女A はあ、世界、ルール。

女D 想像すれば、変容する。

男 あ。

女D 何？

男 それ、わたしの、

女D 何？

男 なんでもありません。

女D おばあちゃん。

女A え、ああ。

女D あなたが、そう言ったのよ。

女A はあ。

女D おばあちゃん。(ト、女B・Cに)

女C え。

女B あたしたちも。

女D そうそう。

女A おばあちゃん。

男 それでは皆さん。後はよろしくお願いしますね。

女B・C・D、返事をしない。

男 えーと。

女B・C・D、男に視線を送る。

男 あ。では、又、後ほど。

男は去る。

女A あのお。

女D おばあちゃん。

女A あ、あのお。(ト、おばあちゃん風?)

女D えー、それ。

女B まあまあ。

女C まあまあまあ。

女A 誰なんですか?あの人。

女D あの人?

女A さっきの、男の人。

女C そうねえ。

女B 何て言えばいいかなあ。

女C 管理人?

女D マネージャー。

女B 支配人?

女D マスター。

女C 助言者?

女D アドバイザー。

女B 英語で言えば良いってモンじゃない。

女C そうそう。

女D いいでしょ。

女B 世話役?

女D コンシェルジュ。

女C だから。

女B ん?英語?

女C ん?

女D ま、ひっくるめて、大黒柱みたいなもんよ。

女C 大黒柱って英語でなんて言うの?

女B 知らない。って言うか、あんたまで?

女C あ、いやいや。

女A 大黒柱?

女B 一家の。

女C そうそう。

女A お父さん?

女B お母さん。

女A はい?

女C 大黒柱がお母さんの家も有るよね。

女B そうね。

女D ま、家の中支えるのは必然的にお母さんだけだね。

女C そうやって、父の権威が落ちていく。

女B 亭主元気で留守が良いっていつの話?

女D いやいや、そんなことないのよ。お父さんのことはた

女A よりにしてるのよ。

女A えっと、あの人?

女B まあまあ。
女C まあまあ。

女D ま、物事には順番ってものが有ったり、無かったりするから、まあ、その内、その内。

女A 何か、答えになってないです。あ、でも、これ（ト、スリッパ）、渡してくれました。

女D ああ、それ仕事だし、あの人の。

女A そうなんですか。

女B とりあえず、座る？

女C そうそう、ここ、どうぞ。

女A、女Cの指し示す場所にスリッパを履いたまま座る。

女D ああ、スリッパ。

女A へ？

女B スリッパ、スリッパ。

女B・C・Dは少し腰を浮かし、自分のお尻の下に隠し置いたスリッパを確認する。

女B あたしのはここに。

女D 私もある。

女C あたしもOK。

女A あ、はい、私も。

女A、自分の履いているスリッパを指し示す。

女C あーあ。

女D ああ。

女B あー。

女A え？どう言うことですか？
女C あれ？説明なかった？

女A えっと…。

女B 自分のスリッパは自分で管理する。これこの基本。そうそう、脱いだらすぐお尻の下。これこの基本。はあ。

女C あ、解ってない。

女A ルールですか？

女D ちよつとちがう。

女A はあ。

女B 基本。

女A きほん。

女D ベーシック。

女B 英語で言えば良いってモンじゃない。

女C そうそう。

女D いいでしょ。

女A で、その、基本は？

女C ああ、そうそう、こうするの。

女Cは腰を浮かせ、自分のお尻の下にあるスリッパを取り出す。それを揃えて、その上に調度お尻がくるように正座をする。

女D こうするとね、ほら、立ち上がった時に、自分の真下にスリッパがくるでしょ。

女A はあ、こうですか？（ト、真似てみる）

女B そうそう。

女A はあ。

女B あれ？何か腑に落ちない感じ？

女A いやあ…。

女C いいよ、言ってみて。

女A その、何かもぞしませぬ。
女D そのお？
女B まあ、言われてみればね。
女C でも、履いたまま座ってるほうがもぞししない？
女A そうですか？何か心地いいんです。
女C ふーん。
女A 変ですか？
女B 人それぞれだけどね。
女A あ、じゃあ、こうしたら。

女A、スリッパを脱ぎ、自分の横に置いて座り直す。

女C あーあ。
女D ああ。
女B あー。
女A え？
女C そうする？
女A ダメですか？
女D うーん。
女B そうねえ。
女D 問題があると思うわね。
女C そうねえ。
女B きつと、そうねえ。
女D ちよつと試してみる？
女A はあ。
女B・C じゃ。
女B・C はーい。(ト、立ち上がる)

女A、一緒に立とうとする。

女D いいのよ、あなたはそのままです。

女A はあ。(ト、座り直す)

女B・C・D、女Aの周りを座ったり立ったりしながら動きまわる。途中一人が、女Aの脱いだスリッパの横に座り、女Aのスリッパを自分の反対側に置く。他の二人も同じように女Aのスリッパの横に座り、自分の反対側へ。スリッパはだんだん女Aから遠ざかっていく。

女A あのー、
女D はい。

女B・C・D、スリッパをシャッフルし始める。

女A え、え？
女D はい。

女B・C・D、それぞれ近くにあるスリッパを一足ずつ手にとり、立ち上がる。取り残される女Aとスリッパ。女A、残ったスリッパを履こうとする。

女D ほら。
女B うん。
女C だね。
女A いや…。
女C こうやって戦争は始まるんだね。(ト、持っていたスリッパを放り投げる)

女A は？
女D なんで？

女A いや、だって。

女B それしか残ってなかったから？(ト、持っ

たスリッパを放り投げる)

女A はあ、まあ。

女C でも、それは自分のではないと気づいてはいた。

女A あ、でも、スリッパだし。

女D どれでも一緒？(ト、持っていたスリッパを放り投げる)

女A はあ。

女D よく見て。

女A、スリッパの内側を覗いてみる。何か名前のようなものか記されている。

女A あ。

女D はい。

女Aの持っているスリッパに駆け寄り奪い合う女B・C・D。やがて、先ほど自分たちが放り投げたスリッパも奪い合う。三人、スリッパを拾い、確認し、自分のものでないと分かると、そのスリッパを放り投げる。なかなか自分のスリッパを見つけない。女A、少し呆然と三人を見ている。やがて、女Aもその争いに巻き込まれていく。ようやく自分のスリッパを見つけたと思いきや、それを横取りされ、放り投げられ、いつまで経っても、自分のスリッパにたどり着けない女たち。

女B あらあら。

女C あらあら、あらあら。

女A はい？

女B 大変なことになったねえ。

女D 何が？

女B 何がって、あんた、これじゃまるで、ねえ。

女A えっと？

女C そうそう。これじゃねえ、本当に。

女たち、そんな言葉を繰り返しながら、スリッパを奪い合う。女A、その争いの輪からなんとか抜け出す。

女A あの、

女たち、奪い合いを続けている。

女A あの、一度、止まって。ね、止めてください。

女たち、止まらない。

女B でもさ、

女C だってさ、

女D 私が止まってもね、

女B そうそう。

女C 他の人、止まらないかもしれないでしょ。

女D そうそう。

女B だったらね。

女C そうそう。

女D 私から、止まるわけにはいかないでしょ。

女A そんなことないと思います。

女B そう？

女C そうかな。

女D ホントにそう？

女A それは…

女B あらあら。

女C あらあら、あらあら。

女A はい？

女B 大変なことになったねえ。

女D 何が？

女B 何がって、あんた、これじゃまるで、ねえ。

女A えっと？

女C そうそう。これじゃねえ、本当に。

女A、「やめて下さい！」と事態を收拾する。散らばったスリッパをかき集め、一人一人に返していく。

女A 分かりました。置く位置を右か左に決めましょう。

女D うーん。

女A ほら、利き腕だと取りやすいし。

女B うーん。

女A あ、じゃあ、良いですか？右利きの人？

女A、手を挙げるが、女B・C・Dは反応しない。

女A あれ？

女B それは何をするときの？

女A え？

女B もの書く時？投げる時？コップ持つ時？受話器を持つ時？もしくははバッテリーボックスに入る時？

女A バッテリーボックスに入るときはないです。

女D じゃあ、どれ？

女C どれどれ？

女A あ、じゃあ、お箸持つときはどっちですか？

全員、右手を挙げる。

女D それは、皆そうでしょ。

女B そうね、あたしたちはね。

女C 小さい頃に、絶対直されたよね。

女D そうそう。ま、私は元々だけどね。

女B あたしも。

女C わたしもそうだけど、妹が矯正されてたな。

女A 私は：

妹、石切りするときは左だったなあ。

女C 石切り？

女B やらない？

女A いやあ…。

女D 小さい頃、よくやったわね。

女C 河原でね、平べったい石を見つけて、川の水面に向けて、こう。(ト、立上がって、大きく振りかぶる)

川のせせらぎが聞こえて来る。

女C こうやって、下手投げで、こんな風に石を投げる。と、石が水面でピツと跳ねる。

女B 勢いの収まらない石は跳ねた先でもう一度、ピツ。

女D 次はさつきよりも短い距離で三度目の跳躍をする、ピツ。

女C ここからが勝負所。

女A 勝負？

女C こどもの遊びだからね。

女D つまらないことでも優劣をつけたがる。

女C 石は三回の跳躍でその勢いを失いつつある。後、何回跳べるのか。ピツ：ピピピ…。

女D 四、かな。

女C えー、六、ろく。

女B いや、四。最後のは跳ねてない。

女C えー！
女D だめだめ、ちゃんと跳ねてないと。短くてもちゃんと滞空時間が有ってこそ、一回。

女C ぶー。

女B じゃ、おまけして、5回。

女D だーめ。

女C じゃあ、見せて。

女D お？

女C 六。ちゃんとした六、見せて。

女D よし、見せてあげようじゃないの。

女D、良さそうな小石を拾い川面に向かう。大きく振りかぶって、アンダースロー。小石が川面へと低い弾道で飛んで行く。ピッ：ピッ：ピッ：ピッ：ピッ。小石が川面を切って跳んでいくのにあわせて、女たちの頭が上下する。そして六回目の跳躍。

女A あっ。

石は川中にある岩に当たり、大きく跳ね上がったから水中に没する。それにあわせて女たちの視線は一旦上に上がり、弧を描いて下へ。

女D 六。

女C あり？

女B うーん。

女D 六。

女C 最後のは岩に当たったでしよ。

女D 六。跳ねた回数が問題であって、何に当たったかは問題ではないの。たまたまそこに岩があっただけ。最初っから狙ってた訳じゃないし。って言うか狙えるんだったら狙

って見たら。

女C ずるい。

女D ずるくない。だから狙ってみなさい。

女C ずるい。

女B どう思う？

女A いや、私は。

女C そうだ、やってみて。

女A はい？

女C 石切り。

女A はあ。

女B じゃあ、これで。これ、結構いい石だとおもうよ。(ト、石を渡す)

女A あ。

女B いいから、使って使って。

女A どうも。(ト、受け取り)

女A、大きく振りかぶって石を投げようとする。

女C お、サウスポー。

女A え？(ト、投げるのを止め)ああ、そうですね。でも

女C 箸は右ですよ。あれ？

女C 直されたとか？

女A さあ、物心ついたときはこうでした、多分。いや、で

も良く覚えてないです。

女B ふーん。

女C あ、ごめんごめん、どうぞ。

女A はい。

女A、再び大きく振りかぶって石を投げる。石はピッと最初の跳躍で大きく跳ねる。

女D お!

ドボンと石は水中に姿を消す。

女A あ。

女C あーあ。

女B いい石だったのに。

女A すいません。

女C 残念。

女B ちよつともつたいないかなあ…

女D ま、仕方ないね。

女A ホント、すいません。

女B ああ、いやいや。

女C そんなに気にしなくても。

女D そうそう、大丈夫、大丈夫。

女A はあ。

女C あ、お腹すいてる?

女A え? いや、別に。

女D お腹減ると、むずがるしね。

女A そんな子供じゃないです。むずがってもないし。

女C これあげる。

女C、ポケットの中からキャラメルを1個取り出し

女Aに差し出す。

女A えつと。

女C 良いから。

女A すいません。

女D そう言う時はすいませんじゃなくて、ありがとの方がいいよ。

女A あ、ありがとう。

女C うん、甘いよ。

女D いいから、おあがり、美味しいよ。

女A あたしだけ?

女C あたしらはいいいよ。

女D おあがり。

女A ありがとう。

女A、紙の包みを開き、キャラメルを口に入れる。甘さが口に広がる。

女C 美味しい?

女A 何か、懐かしい。

女B そっか、良かった。

女D その味、忘れないでね。

女A え?

女D よし、じゃあ大奮発。もう一個づつ皆にあげよ。ちよつとお! (ト、男を呼ぶ)

男、出て来て、女Dにキャラメルを渡す。女D、その中から女B・Cに一つづつ渡す。そして、女Aにも、もう一つ渡そうとする。

女D あら、これが最後だわ。(ト、渡す)

女A、一旦キャラメルを受け取るが、女Dに返そうとする。

女A あ、じゃあ、はい。

女D いいの、いいの。

女A いや、だって私は今、

女D いいから。

女B・C、持っていたキャラメルを女Aに押し付けるように渡す。

女A え？

女B 良いから。

女C お母ちゃんには内緒な。

女A はあ。

男・女B・C・D、並んで女Aを見ている。

男 あ、ほら。(ト、上空の何かに気が付く)

女C あ、何か飛んでる。

女A え？

女B ほら、あそこ。

女D ああ。

女A あれは？

男 ただの飛行機です。

女A そうですか？

男 気になりますか？

女A 少し。

男 そうですか。

女B あ、ほら。

女C ああ。

女D うん、何か落ちて来た。

キーンという高音のノイズが聞こえる。

男 例えば、あれを某国のロケットだとすると。

ノイズに混じり、ニュースの音声聞こえて来る。

それはかの国が打ち上げた飛翔体が領空を飛び越えて大海に落ちた時の会見だったり、あの大战の開戦を告げるラジオニュースの音声だったり、遠く離れた国のビルに航空機が突入したニュースを伝えるアナウンサーのコメントだったりが入り交じっている。

女B あらあら。

女C あらあら、あらあら。

女A はい？

女B 大変なことになったねえ。

女D 何が？

女B 何がって、あんた、これじゃまるで、ねえ。

女A えっと？

女C そうそう。これじゃねえ、本当に戦争。

女B え？

女D 経験したことないくせに。

女B そりゃ、まあね。ある？

女A いや、私は。

女C そりゃそうでしょ。この平和な国にずっと生きて来た

女D んだもの。

女A はあ。

女B 先の不幸な戦争？

女C 世界大戦？って言う方が一般的？

女B 先の大戦？

女D ね、何て言うの？

女A あ、そうですね：太平洋戦争。

女C 大東亜とは言わないの？

女A 私はあまり：

女C ふーん。

女D そう言えば、何年経ったんだっけ？

女B 70年？80年？
女D そりや言わないよね、大東亜。死語か？
女B 死語？
女D 死語って言葉も使わないねえ。
女C そうねえ。
女D で？
女C 戦争みたいよ。
女B 久しぶりに。
女D 久しぶりって、フキンシンでしょ。
女C ふーん。
女D ふーんってあんたね。
女A あの？
女D 何？
女A 戦争なんですか？
女B みたいよ。
女C そうそう。
女D テレビが言ってたよ。
女A いや、テレビって？
女D ほら、そこ。
女B そこ。
女C そこそこ。

女A、三人が指し示す方を見つめるが、もちろん、そこにはテレビはない。ただザーと言うノイズの中からニュースの音声聞こえる。

女D ね。

女A : はあ、でも。

女B : C・D あ。

女A え？

女B : C・D ほら。

女A あ、何か、落ちて来た。
女B ま、関係ないけどね。
女C そうそう。
女A 関係ないって？あ、何か遠い国の話ですか？
女B あ、お隣ぽいけど。
女A え？じゃあ、
女B ま、関係ないけどね。
女A いや、
女B だって関係ないもん。
女A はあ：
女C でも関係ないかも知れないけど、大変だよね。
女D 本当にそう思う？
女C だって、戦争だし。
女D うーん。
女C 人が死ぬし。
女D 人ぐらい、毎日毎日死んでるじゃない。
女B まあ確かに死んではいるね。
女C 人が人を殺すし。
女D それも毎日のようにおこってる。
女A えつとお。
女B あたしたちが気にしたってねえ。
女C そっか。
女B 何にもできないし。
女D どうにもできないし。
女C そうかなあ
女B じゃ、何ができる？
女C うーん。
女B どう？
女A は？
女C あ、どうなの？
女A いやー。

女D ほら、やっぱ何もできない。
 女A いや、そんなことは。
 女B じゃあ、何？
 女D 何？
 女A : その、色々考えます。
 女C 何を？
 女A その、戦争のことを、何でそうなったのかとかを。新
 女B 聞見たり、ニュース見たりして。
 女D で、ビール片手に熱く語りあったり？
 女A 匿名でネットに書き込みを試みたり？
 女C あ、いや。
 女B ふーん。
 女D そうかあ。
 女A ね、やっぱ何もできない。
 女C あ、じゃあ、祈ります。
 女D じゃあって。
 女C 祈るって何を？
 女A 平和を。
 女B あーあ。
 女C うーん。
 女A だって何もしないよりは良いかなと思って。
 女C 誰に？
 女A は？
 女C 誰に祈るの？平和。
 女A ああ：
 女B ほらね。
 女D そうね。
 女C じゃあ、神様にする？
 女A へ？
 女D へー。
 女B へー。

女C どうだろ？
 女B じゃあ、どの神様にする？
 女C ああ、そうね。
 女B 神様も色々いるし。
 女C うーん。
 女D うーんじゃなくて。
 女C うん。
 女B だから、どの神様？
 女D 西の方とか、東の方とか。
 女B 北の方とか、南の方とか。
 女D お祈りの方法も様々でしょ。
 女C そうねえ。
 女B どれ？
 女D え？わたし。
 女A そう、どれ？
 女D そうそう、どれにする？
 女C どれって言われても：
 女A あ、じゃあ、例えばこんな感じのやつとか？
 女B 例えばこんな感じのやつとか？
 女C 例えばこんな感じのやつとか？
 女B・C・D、それぞれにそれぞれな祈り方をやっ
 て見せる。
 女A いや、ちよつと。
 女B ふーん。
 女D ふーん。
 女C ふーん。
 女A いや、その、自分自身の中でって言うか：
 女C ああなるほどね。
 女A はい？

女C あなたが？つてことね。
女A え？
女B あんたが神様ってことなの？
女D ああ、なるほどね。
女A いやいや。
女B だって今ねえ。
女D うんうん、言った言った。
女C そうなのかあ。
女A いや、そうじゃなくて。
女B 違うの？
女A 違いますよ。わたし神様なんかじゃないです。だって
 何にもできないし。
女B ほらー。
女D ねえ。
女C そうそう。
女A はい？
女B 神様だ。
女A へ？
女C うん、うん。
女B そもそも、神様は何にもしてくれない。
女D そうそう、確かに。
女A いや、だから：
女B やっぱね。
女D あんたが神様。
女A だから、そうじゃなくて。
女C 何が違うの？
女A あたしの心の中にいるって意味なんですけど。
女D ほらー。
女B ねえ。
女A ええ？
女C そもそも、神様は自分の中にしか存在しない。

女B そうそう、確かに。
女A いや、だから：
女D やっぱね。
女B あんたが神様。
女A あのね。
女C あたしも祈つところ、あんたに。
女D あ、あたしも。
女B あたしもあたしも。
女B・C・D、**女A**に対してそれぞれの形で祈りを
 捧げる。
女A ちょっと、ねえ、やめて下さい。
 女たち、祈るのをやめない。
女A あたしに祈られたって、世界は変わりません。
女B まあ、そりやそうだ。
女C そうね。
女D そうね。
女C 自分の為に祈ってるんだから。
女D なんと利己的な。
女C 宗教なんて、そんなものでしょ。
女D お、言うねえ。
女B 誰かが自分の幸せを祈れば、犠牲をとまなう。
女C きつと誰かが犠牲になる。
女B 誰かの幸せの為に、他の誰かが犠牲にならなければ
 ならない。
女C その為の宗教。
女B 誰かの宗教の為に、他の誰かの宗教が犠牲にならな
 ければならない。

女D ちよつとそれは飛躍し過ぎ？
女B 誰しもが、心の平安を祈るのは悪いことじゃない。
女C それだから平和を祈る。
女B 何と偽善的な
女D 何とこの国的な。
女B まあ、でもよその国のことだしね。
女D そうね。
女C 例えばお隣の国だったら。
女B 火の粉が降りかかって来る？
女D だから祈るの？
女C 自分だけには火の粉が降りかからないように？
女B ふーん。

ノイズの中からニュースの音声が聞こえる。

女B・C・D あ。
女A え？
女B・C・D ほら。
女A あ、何か、落ちて来た。
女B あらあら。
女C あらあら、あらあら。
女B 大変なことになったねえ。
女D 何が？
女B 何がって、あんた、これじゃまるで、ねえ。
女C そうそう。これじゃねえ、本当に。
女D ほんと、これじゃあねえ。
女B ホントいつまでたっても。
女C 同じことの繰り返し。
女D そうねえ。

女B・C・D、女Aを見つめる。

女A はい？
女D いいの？
女A 何がですか？
女B こんな世界でも。
女A えっと？
女B・C・D あ。
女A え？
女B・C・D ほら。
女A あ、何か、落ちて来た。

男、女Aに近づく。

女A こんな世界？
男 ええ、まあ。人と人が殺戮を繰り返す世界。
女A そうなんですか？
男 人は言います、戦争だから仕方がないって。
女A ええ。
男 平和を取り戻すためには仕方がないって。
女A ええ。
男 民主主義を取り戻す戦いだって。
女A …。
男 私たちが受けた仕打ちを忘れたのか？って。
女A リメンバー…。
男 だから仕方ないんだ、いやむしろそうすべきなんだと言
う理由で、あの日はやってきました。
女A あの日？
男 ムイカ。
女A 六日、あの日。
女B・C・D あ。
女A え？

女B・C・D ほら。
女A あ、何か落ちて来た。

女A、上空を見上げている。女B・C・D、女Aを取り囲むようにたたずんでいる。

男 1時45分。パイロットの母親の名前を冠した大型爆撃機が、小さな少年と言う名の一個の爆弾をその腹に抱え、遠く離れた島から飛び立った。6時間半後、彼らは私たちの住む町の上空にいた。

女B その日は晴れていた。

女C 7時9分。

警戒警報のサイレンの音がする。

女C 警戒警報が発令された。

女D 7時31分。

警戒警報解除のサイレン。

女D 警戒警報が解除された。

男 8時9分。上空に到達した爆撃機は観測用の測定器に落下傘をつけて投下した。

女B 地上でそれを見た人は、撃墜された飛行機からパイロットが脱出したと勘違いをして喜んだ。

男 8時12分。T字型をした橋に照準が合わせられた。そして：

女A そして：

時計がカチカチと時を刻む音が響く。

男 8時15分。
女B・C・D あ。

女A え？

女B・C・D ほら。

女A あ、何か、落ちて来た。

時計の音が止み、静寂が訪れる。

男 43秒後。上空約600メートル。小さな少年の中、ウラン235の核分裂が始まる。核分裂開始から100万分の1秒後。大量の放射線が地上に降り注いだ。あり得ないことだが、もし仮に火球も衝撃波も起らなかったとしても、この時点で多くの人が死に至った。

女A 100万分の1秒：

男 100万分の15秒後。青白い閃光と共に直径20メートル程の小さな太陽が出現する。

女A 火球。

男 小さな太陽はその後0.5秒後まで膨張を続け、すぐに収縮を始め、キノコ雲を形成する。地上には熱線が降り注ぎ、ヒトもモノも影だけが残った。

女B ほら。

女A え？

女B これが、あたしの影。

見ると女Bの影がくつきりと現れている。女B、倒れる。

男 熱線の影響は3秒程で終り、続いて熱によって膨張した空気が押し出され、町を襲う。

女A 衝撃波：

女D ピカって光って、すぐに髪の毛が燃えはじめた。

慌てて井戸の有る方へ走り始めたときに、身体が宙に舞った。

女D、倒れる。

男 30分後。黒い雨が降って来た。

女C ベトベトした雨だった。それでも口を開けてそれを飲んで。

女C、倒れる。

カチカチと言う時計の音。

女A なんで？

男 戦争を仕掛けた報い？

女A でも…

男 戦争を終わらせるため？

女A ……

男 …いや、違うな。

女A え？

男 ただ殺された。ヒトの造りしモノによって。人によって、

ただ殺された。…繰り返し返されていくだけだ。世界は。

女A でも…

ザーと言うノイズが聞こえて来る。

男 ニュースをお伝えします。25日、北緯38度線において北側からの砲撃が開始されました。

女A え？

男 次のニュースです。29日、シナイ半島においてイスラエル軍が侵攻を開始しました。7日、アメリカ軍による北ベトナムへの爆撃が開始されました。24日、ソ連軍がア

フガニスタンへの軍事介入を始めました。22日、イラク軍がイランの空港を爆撃しました。2日、アルゼンチン軍がフォークランド諸島へ上陸、同島を制圧しました。17日、イラク軍のクエート侵攻に対し、多国籍軍は空爆を行いました。27日、ロシア軍とみられる武装勢力がクリミア議会を占拠。12日、スーダン軍が南スーダンを空爆。20日、イラク政府と連合軍が掃討作戦を開始。

ザーと言うノイズ音。

女B・C・D あ。

女A え？

女B・C・D ほら。

女A あ、何か、落ちて来た。

男 11日。…たった今入って来たニュースです。ニューヨークの世界貿易センタービルに航空機が激突したようです。現地からの中継をお伝えしております。あ、今、2機目の飛行機が突入したように見えました？大きな爆発がワールドトレードセンターで起っております。信じられないような映像をご覧いただいていますけれど、これは現実の映像です。

女A これは？

男 19日、アメリカは大量破壊兵器を所持してるとの理由でイラクに攻撃を開始。

女D 殺されてるねえ。

女C 死んでるねえ。

女B 犠牲になってるねえ。

男 殺しあってる。

女A そんな世界。

男 そ。

女A 私。

男 こんな世界を生きて行く。

女A でも…。

女C そうそう。

女D そうねえ。

女B 戦後何年経ったんだっけ？

女C 70年？80年？

女D この国ではないねえ。

女A 戦争？

女B 放棄したんだっけ？

女C 正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、

女D 国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、

女B 国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄

女C 陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。

女B・C・D なんだって。…ふーん。

女B でも、何かない？陸海空の名を持った部隊が。

女D ああ、そうねえ。

女C 我が国の平和と独立を守り、国の安全を保つため、

女B 直接侵略及び間接侵略に対し我が国を防衛すること

を主たる任務とし、

女D 必要に応じ、公共の秩序の維持に当たる。

女B・C・D なんだって。…ふーん。

女D 平和だよ。

女B だからって訳じゃないけど。

女C そうそう、この国にいれば、戦争は関係のないことにな

女D なるかもよ。

女D じゃあ、大丈夫じゃない。

女B そうそう、でも何か変えるんでしょ。

女D ああ、色々ね。

女C 我が国の平和と独立並びに国及び国民の安全を確保

するため、

女D 内閣総理大臣を最高指揮官とする国防軍を保持する。

女B 国防軍になるんだ。

女C 独立国家が、国民の安全を確保するため軍隊を保有す

ることは、

女D 現代の世界では常識。

女B・C・D なんだって。…ふーん。

女B あ、じゃあ前の方も？

女C 正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、

女D 国権の発動としての戦争を放棄し、武力による威嚇及

び武力の行使は、

女B 国際紛争を解決する手段としては用いない。

女C 前項の規定は、自衛権の発動を妨げるものではない。

女B 自衛権の発動ねえ。

女D 個別的自衛権と、

女C 集団的自衛権。

女B 安全保障理事会が国際の平和及び安全の維持に必要

な措置をとるまでの間、

女D 個別的又は集団的自衛の固有の権利を害するもの

はない。

女B・C・D なんだって。…ふーん。

女C ま、どの国も自衛権の行使って言って始めるんだけど

ね。

女B 戦争。

女D そうね。

女A こんな世界。

女B 戦争のない国。

女C 平和な世界。

女D ヒトもあふれ、

女B モノもあふれ、

女C ジョウホウもあふれ、

女 D 食べるモノに苦勞しなくなつて、
女 B 住む所にも苦勞しなくなつて、
女 C 便利になつて、
女 D 平和な世界。
女 B そうそう、こんな話知ってる？
女 C 何？
女 B 黄金のM型アーチ。
女 D 大戦の後、McDonald'sのある国同士は戦争をしてないんだつて。
女 C へえー、そうなの？
女 B ちよつと微妙なんだけどね。
女 C どういうこと？
女 D 近年、この理論は崩壊しているの。
女 B そうそう。
女 C そうなの。え、どうして。
女 B そうなの！
女 C 何よ。
女 B 何よ。
女 C だから、どうして。
女 B それは。
女 D コソボの空爆や、グルジアの紛争なんか、その例。
女 C ふーん。
女 B 何よ。
女 C 別に。
女 B とにかく、ある国の経済が McDonald's がチェーンを展開できるくらいに豊かになると、人々は戦争をしたがらなくなるらしい。
女 D むしろ McDonald's にハンバーガーを求めて行列を作るらしい。
女 C ふーん。
女 B McDonald's は平和の象徴つてこと。

女 C えー？
女 D だつて、そうらしいよ。
女 C じゃあ何、McDonald's をつくれば良いつてこと？
女 D そうそう。
女 B 世界のすべての国と地域に McDonald's を作れば、もう戦争はおきない。
女 D 世界には200ちよつとの国と地域があつて、
女 B その中で McDonald's のある国と地域は119。
女 C うわあ、微妙な数。
女 D ま、まだまだつてことよね。
女 B だから作れば良いんだつて。
女 C 内戦に苦しむ国にも？
女 D 飢餓に苦しむ国にも。
女 C かの北の国にも？
女 B そうそう。
女 C そうそうつてね。
女 D なに？
女 C だつて、道ばたにやせ衰えた子供たちが横たわつてる町に、作るの、McDonald's ？
女 B そうそう、オレンジ色の店に黄色のネオンつけて、笑顔はただですつて、
女 D そのただの笑顔で1個が平均月給よりも高いハンバーガーを売りまくる。
女 C 誰が買うの？
女 B さあ？でも、それが豊かさの象徴。
女 D 平和の象徴。
女 C いやあー。
男 断つておきますが、McDonald's に個人的な恨みがある訳ではないですから。
女 A え？
女 B そうそう。

女C そうなの？
女D 毎週毎週、メールが届く。
女B あれを食べろ、これを食べろって。
男 断っておきますが…、

男はどこから取り出したのか McDonald's のハンバーガーを頬張っている。

女D 24時間いつでも、どこでも、黄色のMの字があたし
たちを迎えてくれる。

女B いつでもどこでも、ハイカロリー、高栄養素の食物を
与えてくれる。

女C 平和だねえ。

女D とっても。

女B とつても、とつても。

女C 平和なこの国。

男 そんな世界です。

女A はあ。

男 どうします？

女A どうするって？

男 決めるのは、あなたですから。

女A えっと…

女B・C・D あ。

女A え？

女B・C・D ほら。

女A あ、何か、落ちて…

男 例えば、ここを二十年八月六日の夜明け前だとすると。

するとそこはとある民家の居間となる。女C、座つて外を眺めている。女B、入ってくる。

女B おはよう。(ト、通り過ぎるが戻って来て) どうしたの？

女C ん？あ、おはよ。

女B 何？眠れなかったの？

女C ううん。

女B ふーん。

女C 今日もいい天気になるなあ。

女B ああ、暑くなりそう。

女C うん。

女B・C、ぼんやりと外を眺めている。

女A これは？

男 例えげです。

女A 例えげ？

男 想像すれば変容する。

女A 世界のルール。

男 そうです。

女A でも、これは。

男 世界は無数に存在するのも知れませんか。

女A えっと。

男 想像し変容した世界を認識する。その認識の仕方次第で、

女A その認識の数だけ世界はあるのかも知れない。

女A じゃあ、

男 あなたが記憶している世界。もしくは忘れてしまった世界。

女A これはあたしの記憶？

男 妄想かも知れません。

女A 誰の？

男 あなたの。

女A わたしの。

男 もしかすると、私たちの。

女 A あなたたち？

男 想像すれば変容する。

女 A 世界のルール。でも、過去は変えられない。

男 そうですね。

女 A じゃあ、なんのために？

男 祈ることはできます。

女 A えっと。

男 神様じゃないですよ。

女 A あ、ええ。

女 B・C、離れた部屋からの泣き声を聞いて、

女 B あ、泣いとる。

女 C …。

女 B ちよつと、あんた行って。

女 C …ん、何？

女 B だから、幸子。

女 C 幸子？

女 B 聞こえん？何かぐずってる。

女 C ふーん。

女 B ちよつとお。

女 C お姉ちゃん、行ってよ。あたし忙しい。

女 B 何が忙しいのよ。ぼーとして。

女 C 乙女は考えることが多いのよ。

女 B ふーん。

女 C 何よ。

女 B バカなこと言つたらんと、はよ。幸子、あんたがあや

女 C すと一発で泣き止むんやから。

女 B もう。

女 B お願い。

女 C じゃ、あの髪留め譲つて。

女 B それとこれとは話が別。

女 C えー。

女 B 光子。

女 C しょうがないなあ。

女 C、立ち上がり、出て行く。女 B、女 C が座つていた所に行き、同じように外を眺める。

女 A 幸子？

男 ええ。そう名付けました。

女 A え？

男 その字の通り、世界が幸せになるようにと。

女 A ちよつと待って下さい。

男 上の娘は世界のことをたくさん知って欲しいと想い、下の娘は世界を明るく照らすようにと、名付けました。

女 A 幸子。

男 もちろん幸せの形は人それぞれです。こちらの勝手な想いです。

女 A 名付けられた。

男 そう、名付けました。生きていることの一つの証として。

女 A しかし…

女 A しかし、何です？

男 いえ。ただ、そこで生きていた。

女 A ええ。

男 私たちには名前があった。

女 A わたしは？

男、答えない。女 C、戻って来る。

女 B お、さすが。

女C 姉ちゃんが下手なんよ。
女B そう？

女C、座っている女Bを押しつけて座り、再び遠くを眺める。

女C スリッパ履かせて、頭なでて、ちよつと子守唄、歌ったげたら、すぐ泣き止むって。

女B 子守唄？

女C ふふふーん、ふふふーん、ふふ、ふふふふーん。ふふふーん、ふふふーん、ふふ、ふふふふーん。ふふ

女B なにそれ？

女C じゃけん、子守唄。

女B ♪父さん強い兵隊さん、って奴じゃないの。

女C 違うわ。

女B ふーん。んで、スリッパ？

女C 知らんの？

女B スリッパってスリッパ。

女C そう、お父ちゃんの工場で作った。

女B 何で？

女C 知らんよ。履いとる感覚が気持ち良いんじゃない？

女B すぐ脱げるじゃろが。

女C そやろね。

女B だからすぐ、ぐずるんよ。

女C 知らんよ、あたしに言わんと、幸子に言うてや。

女B 幸子には言うても、まだ解らんやろ。

女C じゃけん、スリッパ履かせて、頭なでなでしとんじやないの。

女B ほうかあ。

女C うん。

女B スリッパかあ。

女C うん。
女B ほんで、あんたは何しとん？

女C うん。

女B 寝れんかったんじやないの？あれ何時頃やった？

女C 二時ごろやった。

女B ほっか、あたしはあれからずっと寝れんかったわ。

女C イビキかいとったよ。

女B あたし？

女C うん。

女B かいとらんよ。

女C 自分じゃ解らんじやろが。

女B かいとらん。

女C すーがー、すーがーって。

女B 寝息じゃ。

女C 寝とるじやないの。

女B じゃけん、熟睡はできんかったって言う意味じゃ。

女C そ。

女B ほんで？

女C 何？

女B 何？じやないでしよが、さっきから。

女C じゃけん、今日もいい天気になるなあって言っとるや

女B ろ。

女C ふーん。

女B いけんの？

女C 別に。

女B・C、座って遠くを眺める。ゆっくりとした朝の時間。そこへ女D、やって来る。

女D ちよつと、起きてるんやったら…

女B・C、ボーと外を眺めている。

女C (それに気が付き) 姉ちゃん。
女B 何にも言っていない、言っていないから。
女D ふーん。

外から心地の良い風が吹き込んでくる。

女D どしたん？
女B・C あ、おはよう。
女D うん、おはよう。何？何か面白いもん見えるん？
女B あ、うん、光子が。
女D 何？
女B 今日もいい天気になるって。
女D そうね。

三人、そろって朝日を眺める。

女D 文子はどうするの？
女B あ、今日は工場。
女D そやなくて。
女B へ？
女D あ、そ。

朝日が差し込んでくる。

女D 今日もええ天気になるねえ。暑なりそやねえ。
女C はあり。
女D 夏は暑いもんじゃないの、なんねそのため息は。
女C はあり。
女D なんやの？
女B 光子、いつもの。
女D あら、そうなん？
女C 違うわよ。
女B ねー。
女C うるさい。
女D あらあら、ね、どこの人。
女B どうやら、
女C うるさい。
女B 良いじゃないの。
女C うるさい。
女D ふーん。

女B、女Dにこっそり耳打ちをしようとする。

女C ねえ。
女D ン？
女C 母さんはなんで父さんだったの？
女D 何を言い出すかと思えば。
女B そう言えば、あたしも聞いたことない。
女D なんてやるね。パツとしてないしね。
女B うん、うん。
女D お見合いだったしね。
女C ふーん。
女D 何だって良いのよ、出会いなんて。そこから大切な
女C ンだし。
女C ふーん。
女D 生活するのは、そう言うもんじゃない？
女C ン？
女D 当たり前のように毎日が過ぎて行って、そうそう事件
女D が起るもんじゃないし、ふっとした瞬間に今が一番幸せっ
て思えば良いんじゃないかな。

女B そんなことない。
女D 何？
女B 出会ってない。
女D あら、そうなの？
女B うん。
女D 気づいてないだけかもよ。
女C 出会っちゃったのかなあ。
女D あ、そうなの。
女C はあ。
女B 母さん。
女D うん。
女B 今年に入って、3回目、あ、4回目？
女D あらあら、そうなの。
女B 何でも、
女C うるさい。
女D ふーん。

三人そろって、遠くを眺める。男、入って来る。

男 おはよう。
女B・C おはよう。
女D おはようございます。
男 何か焦げ臭くないか？
女D ああ！ちよつと、あんたたちも、ちやっちゃと顔洗って、手伝ってちようだい。
女B あ、はいはい。
女D はいは一つで。
女B はい。

女D、台所へ行く。

女B ほら、光子。
女C あたし、顔洗った。
女B 洗ってないでしょ。
女C もう、姉さん、うるさい。
男 早く母さん手伝ってあげないと。
女B あ、うん。：もう。

女B、去る。

男 どうした？何か面白いもんでも見えるんか？
女C うん。
男 どうかしたか？具合悪いんか？
女C ねえ父さん。
男 何だ？
女C ：どうして世界はこんなにも美しいんだろう。
男 やっぱ具合悪いんじゃないか？
女C そうじゃない。
男 そうか。

女C・男、朝日を眺める。

男 今日も暑くなるな。
女C うん。
男 ずっと見とんたんか？
女C うん？
男 夜明け前からそこに居るやろ。
女C ：ああ、うん。
男 面白いか？
女C うーん、どうだろ？
男 そうか。
女C ：夏の間だけかな。

男 うん？ああ。
女C うん。

男 冬場にやられたら、寒くてかなわん。凍え死ぬ。

女C そうじゃなくて。

男 うん。

女C 夏の間だけ、ほら、あそこ。

男 うん？

女C あそこの間から日が昇って来る。

男 ああ。

女C 夜が少しずつ溶けていく。山の輪郭が夜を抱え、朝に抗おうとしている。その抵抗に終止符を打つように、ピカって朝日が顔を出す。

男 ふーん。

女C あ？

男 何だ？

女C 朝日の顔ってどんなんだろ？

男 さあな。

女C ：今日も一日が始まったって感じがする。当たり前のように一日が始まる。当たり前のように日が昇る。

男 そうだな。

女C 冬はダメだね。もつとこつちの方で、もつと暗い。

男 地軸の傾きって奴だな。

女C ？？

男 自転と公転って学校で習わなかったか？

女C うーん？

男 そうか。ん。

男、ポケットからキャラメルを取り出し差し出す。

男 朝、甘いものを食べると、脳が活性化するらしい。
女C うん。

男 頭も腹をすかせるらしい。
女C うん。

男 ほれ。

女C うん。：うん？

男 腹すかせてないか頭？何かよー解らんこと言うとるぞ。

女C なんね。

男 ほれって。

女C いらんよ。子供じゃなし。幸子にやって。

男 ほうか。

女C 美味しそうに食べるから、幸子。

男 ほうか。

女C お祭りの時に初めて食べたんよ、それからずっと、キャラメルキャラメルって。

男 ほうか。

女A、ポケットの中からキャラメルを取り出し見つめる。

女A キャラメル。

男 ほうか。

女C うん。

男 ：パツとしてなくて、いいんだぞ。

女C ？

男 父さんが言うのも何だが。

女C うん、：あ、うん。

男 見た目やら、生まれ育ちやらはどうでも良いから。

女C うーん、見た目は：

男 ほうか。

女C ふふふふふ。

男 やっぱ具合悪いんやないか？
女C 大丈夫、と思う。：ふふふ。

男 気持ち悪いぞ。

女 C 娘に言う言葉？

男 すまん、すまん。

女 C ええけど。

男 ほうか、好きになったら全力でそんな人のこと愛するんやぞ。

女 C そんなん、解つとる。

男 ほうか。

女 C ふふふふふ。

男 だけんな。

女 C 父さん。

男 いや、言うたらんぞ。みなまでは言うたらん。

女 C それ、言つとると同じじゃけん。

男 ああ、すまん。

女 C ふうり。

男 やっぱ、調子悪いんじゃないか？

女 C 夏風邪がうつったかな？熱は下がったね、幸子。

男 ああ、良かった。

女 C さつきぐずつとったから、スリッパ履かせといた。

男 又、スリッパか。

女 C うん。お気に入りにじゃけんね、幸子の。父さんのスリッパ。

男 ほうか、あれか。

女 C うん。

女 A スリッパ。

女 A、自分の履いているスリッパを見つめる。

男 おおきゆうなあって、変なくせにならんとええが。

女 C 大丈夫でしょ。

男 ほうか。

女 C 又、作れるようになるやろか？

男 何が？

女 C スリッパ、父さんの工場。

男 まあ、いつまでもこんな時代じゃないじゃろ。

女 C そうやろか？

男 そんな風に考えるけん、体調の悪くなるんじゃないか？

女 C ああ、うん、大丈夫。…ねえ、父さん。

男 うん？

女 C 明日も日は昇る？

男 当たり前だろう。

女 C そうね。

女 C、去る。男、顔をあげる、朝日がまぶしい。
女 A、男の側へ行き、並んで座る。

男 今日も、暑くなりそうだな。

女 A ムイカ。

男 うん。

女 A あの日、わたしは？

男 うん？

女 A なんで？

離れた所に女 B・C・D、立っている。

女 B たまたま。

女 C そ、たまたま。

女 D そうね。

女 A わたし。

男 あれから何年たった？

女 B 70年？80年？

女 C 時間の感覚はあまりないけどね。

女D ずっと、あんたの側にいたよ。
女A 私だけ？
男 そう、お前だけ。
女A 何で？

女B・C・D、女Aに近づき、優しく彼女を寝かしつける。

女B たまたま。
女C そ、たまたま。
女D 誰かが、お前を選んだのか？
女B あ、どうだろ？
女C 神さまって話？
女D でも、じゃあ、あたしたちは？って話になるよね。
女B あ、そうか。
女C 選ばれなかったってことになる？
女A 違う、と、思う。
女D そうね。
女B たまたま。
女C そ、たまたま。
男 六日。
女A あの日。
男 誰かが、もちろん神様なんかじゃなく、ヒトがヒトの死を望んだ。
女B ヒトだからね。
女C 人間だからね。
女A たった一人、生き残った。
女D だから、ずっと側にいたよ。
女A いっそ。
男 いっそ、何だ？
女A いっそ：

男 いいぞ、選ぶのはお前だ。
女A …。

カチカチと時計が時を刻む音が聞こえる。

女B ま、こんな世界だし。
女C 平和な世界じゃない。
女B モノはとらえようかな。
女D 表があれば、裏が有る。
女C 日なたが有れば、日陰がある。
女B 朝があれば、夜がある。
女C こつちから見ると、
女D こつちから見るのでは、
男 見え方が違う。
女A だから？
女C 平和の裏には、
女B 混沌がある。
男 でもな、
女A こんな世界。
女D お前が生きて来た世界。
男 お前がこれから生きていく世界。
女A …。
男 どうする？
女A わたし…。

カチカチと言う時計の音。遠くに飛行機の飛ぶ音。一瞬の無音。

女B あ、ほら。
女C ああ。
女D うん、何か落ちて来た。

キーンという高音のノイズ。

女A、舞台中央に横になっている。心音を計る機械的なピッピッと音響している。男・女D、腰掛けて掛けている。まるで病院の待ち合っているように見える。やがて女D、携帯電話を取り出し男から少し離れた所に移動する。

女D あ、もしもし。お母さんだけど、

女C 留守番電話センターにお繋ぎします。プツプツ、こちら留守番電話センターです。ピーと言う発信音の後にメッセージをお吹き込み下さい。ピー。

女D あ、もしもし。お母さんだけど、そうね、仕事中でもんね、電話とれないわね。元気にしてる？こっちはね、お父さん共々元気にしてるわ。あれ、えっと、どうもこの留守番電話って苦手。昔の電話機の留守番電話も苦手だったけど、こうやって携帯電話になってもまだあるのよね、留守番電話。何か話し方も、固くなっちゃやし。何かちゃんとした日本語、使わなくっちゃいけないような感じだし：ああ、そうそう、おばあちゃんがね、

女C ピー。

女D、恨めしそうに携帯を見つめている。
舞台の別の場所で女B、車の運転席で誰かを待っている。そこへ女C、やって来る。

女B おかえり。

女C ただいまあ。(ト、助手席に乗り込み)ありがと、助かったあ。

女B おかえりい。

女C ああ、うん。お土産ないよ。

女B えー。

女C エーじゃない。

女B 漬け物、楽しみにしてたのに。

女C 仕事片付けて、新幹線飛び乗って来たんだから。

女B じゃ、赤福は？

女C 赤福も一緒でしょ。

女B 赤福う。

女C だから、仕事片付けて、：ふっ、はは。(ト、思い出し笑い)

女B 何よ？

女C 思い出した、赤福独り占め事件。

女B ああ。

女C あたしご飯、赤福でいい。

女B ねえ。

女C 好きねえ、赤福。

女B そうですけど、何か。

女C でも、ありません。

女B ちえ。

女C だいたい、お土産つても変でしょ。

女B まあ、そうか。

女B、車を動かし始める。

女B あ、母さんにメールして、駅出たって。

女C わかった。20分ぐらい？

女B そんなもんかな。

女C ほーい。

女C、携帯でメールを打つ。

女C : 母さんに怒られたよ。

女B : 何？

女C 留守電聞いて、すぐにかけて直したんだけどね。

女B うん。

女C どーしても外せない会議だったし。

女B うん。

女C 「何とか今夜中に新幹線でそっちに行けるから」って。

女B ああ。

女C うん。一瞬の沈黙の後に、

女D ちよつとあんた、行けるじゃないでしょ、

女B・C 「帰るでしょ」。

女B ま、いつものことでしょ。

女C うん、そうなんだけどね。でも、もうあっちの方が長

女B いしね、住んでるの。

女C そっか。

女B ああ！

女C え、何？

女C 何で、今のところ、曲がらないの？

女B あたし、知らないし、そっち。

女C もう。

女B 絶対、こっち混むよ。

女C でも、知らないもん。

女C もう。

一方病院の待ち合いでは、

女D どう？

男 うん、今は落ち着いてる。

女D そう。

男 とは言え。

女D そっか。

男 うん。

女D さっきメールがあって、あの子たちもうすぐ着くって。

男 そうか。

女D 一度、ちゃんと聞きたかった。

男 うん？

女D お義母さん。

男 ああ。

女D うん。

男 話さないよ。

女D え？

男D もう二度と話さんって。

女B・C、男と女Dの所にやって来る。

女D ああ、お帰り。混んできた？

女B いや、混んできた、混んできた。

女C 姉さんがあの道使うから。

女B あたし、あの道しか知らないもん。

女C なんて？ ずっとこっちにいるんしょ。

女B そんなこと言っても、車で駅からここに来る道はあそ

女C こしか知らないだって。

女C だから、ナビつけろって言ってんの。

女B あたしは地図が好きなの。で、グーグルより、ヤフー

の方が好きなの。

女D ちよつと、あんたたち。

女B・C : ごめんなさい。

女BのスマホのSNS系プッシュ通知音がなる。

女 B あ。

女 C、女 B へ一瞥。

女 B うん。(ト、ごめんごめん気にしないで)

女 B のスマホ、SNS 系プッシュ通知音を連発。

女 C ちよっとお。

女 B ああ、ごめん。

女 D 電源。

女 C 恥ずかしいわあ。

女 B だから、ごめんって。

女 C まったく。

女 B だから、ごめんって言うてるじゃない。

女 C ごめんって思っでないでしょ。

女 B 何でよ。

女 C 別に、何となく。

女 D ちよっと、静かにしなさい。あなたたちだけじゃないのよ。

女 B・C ごめんなさい。

女 D ホント、いいかげんにしなさい。

女 B・C はい。

女 D ま、でも、お疲れさま。

女 C ごめんね、遅くなっちゃって、どうしても一つ片付け
ないといけない仕事有って。

女 B で、その後は？

男 ああ。今は寝てる。

女 C ちよっとあつて来ていい？

男 ああ。起こすなよ。

女 C わかつてる。

女 B あ、あたしも。ああ、良いから、母さん。(ト、制し)

女 B・C、病室に入り、女 A が横たわっている側に
行き、様子を見る。女 A の寝息が歌のようにも聞こ
える。

女 C 今なんか言った？

女 B って言うか唄った？

女 C 寝言？

女 B 寝唄？

女 C ばあちゃん？

女 B ちよっと。

女 C あ、うん。目覚めたのかなって思っで。

女 B うん、でも。

女 A、すやすや寝ている。よく見るとスリッパを履
いたまま寝ており、片方脱げている。それを見つ
けて、

女 C スリッパ。

女 B ああ。(ト、脱げたスリッパを履かせてあげる)

女 C 何か、変な言い方なんだけど。

女 B うん？

女 C 笑ってるみたい。

女 B うん。

女 C 苦しくないみたいだね。

女 B だね。

女 C よかった。

女 B うん。

女 B・C、女 A を見ている。

女C ね、どう思ってたんだろ、ばあちゃん。
女B 何を？
女C この世界。
女B ああ。一度、聞いてみたかったな。
女C みたかったって。
女B 何？
女C 過去形。
女B あ、違うって。
女C うん。
女B ；何かね、話したくないって。
女C うん？
女B 父さんが言ってた。
女C そっか。
女B 辛かったんだよ、きつと。
女C きつと、今でも、なのかな。
女B こんな世界に？
女C こんな世界だから。
女B うん。ね、憶えてる？
女C うん？
女B 平和記念資料館に行った時のこと。
女C ああ。
女B うん。
女C はしやぎ過ぎてたんだよね。
女B だって。
女C ま、子供だったしね。あたしは何にも憶えてない。
女B 色々知らなかったし。
女C うん。
女B あの日、あの日の夜、眠れなかった。
女C うん。
女B 目をつぶるとき、あの蠟人形たちがさ。

女C こうやって。(ト、手をだらんと前に出して)
女B 怖くて、怖くて、トイレにも行けなかった。
女C うん。
女B トイレの前までは行ったんだけどね。
女C 何だ。
女B 何だじゃなくて。前って言うか、トイレに続く廊下の
女C 端に立ちつくしてた。
女B ああ。
女C そう、ばあちゃんの部屋の前。
女B 廊下のこっち側、ふすまの部屋。ばあちゃんの部屋だ
女C ったね。
女B うん。廊下で動けなくなってたあたしを、ばあちゃん
女C は部屋に入れてくれた。
女B へえー。
女C でね、どこから市内地図を取り出して来て、布団の
女B 上に広げて見せてくれた。
女C うん。
女A 女A、起き上がる。するとそこはかつてのばあちゃ
女B んの部屋になる。
女A 資料館。
女B うん。
女A 怖かったか？
女B うん。
女A そうか。
女B ばあちゃん。
女A ん？
女B 又、落とされる？
女A うん？
女B 原爆。

女A さあな。
女B :そう。
女A これ、解るか？
女B うん。
女A ここがな、うちの有る所。
女B うん。
女A それで、ここが原爆の落とされた所。
女B :。
女A 計ってみるか？何センチあるか。

女A、地図に物差しを置き測る。

女A これ、何センチある？

女B 5。

女A この地図は、えっと、1センチが500メートルだから、5センチだと？

女B 2.5キロ。

女A そう。

女B うん。

女A あのな、原爆が落ちて、一瞬で焼け野原になったのは、半径何キロのところだったか、わかるか？

女B 知らない。

女A そっか。

女B うん。

女A だいたいな、半径2キロなんよ。

女B うん。

女A な、うちは大丈夫。

女B うん。

女A それにな、ほれ、ここに山がある。物差し当ててみ：

ほらな、うちはこの山の裏っかわになって、影になるから尚のこと、大丈夫。

女B うん。
女A 大丈夫、大丈夫。

女A、横になる。情景は再び病院の一室になる。

女C ね、ちよっと待って。

女B 何？

女C 納得したの？それで。

女B うん。

女C 単純ねえ。

女B ま、子供だからね。何か解んないけど、同じ場所に落とされるって思ってた。

女C ふーん。

女B 同じ場所にもう一度落とされるなんてあり得ない。ただでさえ理不尽なのに、もう一度なんて。って理解したの

は大人になってから。あの時は、ばあちゃんのその説明で何となく安心した。

女C そう。

女B あんな死に方、殺され方は嫌だっけは思ってた。

女C うん。

女B ふふふ。

女C 何？

女B でも、あれ、ばあちゃん、少しだけズラしてたんだよ。地図上のあたしたちの家。

女C そうなんだ。

女B これもさ、大人になって何となくグーグル見て解ったんだけどね。距離は100キロ、ぎりぎり山の影にならな

い場所だった、あのころのアパートの位置。

女C そうなの？てか、そこはグーグル？

女B そこ今突っ込むとこじゃない。

女C ごめん、つい。

女B あたしを安心させるために、わざとだったのか？本気で間違えてたのかは分かんない。てか、焼け野原にならなきゃ大丈夫って訳でもないしね。

女C そうだけど。

女B でもね、その地図を見た後、ばあちゃんはあたしを抱きしめてくれた。「大丈夫、大丈夫。きっと皆が、お前を守ってくれるから、だから大丈夫」って。

女C そう。

女B そこで、気が緩んじゃったのね。

女C 何？

女B そのまんま、ばあちゃんの布団の上に溜まりに溜まった、おしっこが…

女C もう。

女B へへ。

女C ばあちゃん、何にも話してくれなかったけど、それでも良いんじゃないかな。

女B うん。

女C ばあちゃん、生きてくれたから、あたしたちがある訳だし。

女B そうね。

女C ね、知ってる？

女B 何？

女C あたしの今住んでる街ではね、六日の八時十五分にサ

イレンが鳴らないんだよ。

女B え、そうなんだ。

女C うん。こっただけなのかな？

女B さあ、どうなんだろう。

一方、病室の外では。

男 母さんな、結局何も話してくれなかった。

女D そっか。

男 小さい頃の話だし、ほとんど憶えてないって。

女D 本当にそうなんじゃない？

男 でもなあ。

女D 記憶の遠い所に押しやることでバランスとれてたん

じゃない？

男 まあそうなんだけどね。

女D 休ませてあげましょうよ。

男 ああ、うん。

女B・C、病室を出て、女Dと男の所にやって来る。

女D ああ。

女B うん。

女C 大丈夫そう。

男 ああ。

女B 何か寝言、言ってた。

女C 寝唄？

女D 唄？

女C 何か、鼻歌ぽい感じで。

男 そうか。

女C ふふふーん、ふふふーん、ふふ、ふふふふーん。(ト、鼻歌ってみる)

女B 下手くそ、全然違う。

女C じゃ、やってみてよ。

女B ふふふーん、ふふふーん、ふふ、ふふふふーん。(ト、正確に鼻歌ってみる)

女D 知ってる？

男 うーん。

女C 何の曲だろうね？

女B うん。

男 寝言なんだろ？
女 B にしては結構しつかり。

男 目、さましたのか？

女 C 少し声かけてみたけど、すぐ寝息に変わったから。

男 そうか。

女 D で、何の曲なの？

女 B だから、ふふふーん、ふふふーん。

女 C 違うって、ふふふーん、ふふふーん。

そんな会話のなか女 A、起き上がっている。

女 A あの。

男 はい。

女 A わたし、どうしたらいいんでしょう。

男 ああ、そうですねえ。まあ、あなたの選択仕方次第です。

女 A 選択。

男 世界は無数に存在するのもかも知れない。あの日に戻って、

女 A そこでやめてしまう選択もあります。

男 あなたたちはだれなんですか？ 神さま？

女 A 神は信じないのでは？

女 A ええ。

男 そうですね、例えるなら世界です。

女 A 世界？

男 あなたが選択し、想像して変容させることのできる、無

数の世界。

女 A 無数の世界。

男 選ぶのはあなたです。

女 A 選ばないといけませんか？

男 世界は無数の選択の上になりたってますから。

女 A そうですか。

男 選ぶのはあなたです。

女 A ええ。

女 B ・ C ・ D あ。

女 A え？

女 B ・ C ・ D ほら。

女 A あ、何か、落ちて来た。

女 B あらあら。

女 C あらあら、あらあら。

女 B 大変なことになったねえ。

女 D 何が？

女 B 何がつて、あんた、これじゃまるで、ねえ。

女 C そうそう。これじゃねえ、本当に。

女 D ホントこれじゃあねえ。

女 B ホントいつまでたっても。

女 C 変わらないねえ。

女 D そうね。

女 B 同じことの繰り返し。

女 D いいの？

女 B こんな世界でも。

女 C 人と人が殺戮を繰り返す世界。

女 D それを仕方がないって言い訳する世界。

女 A こんな世界。

カチカチと言う時計の音が聞こえて来る。

女 A でも、想像すれば世界は変容するんですよ。

男 ええ。

女 A それがこの世界のルール。だったら、想像すればいい、

女 A イメージすれば良いんですよ。

男 そうですね。

女 D 忘れないでね。

女 B あたしたちのこと。

女 C あんまり憶えてないかも知れないけど。

女 B キヤラメルやら。スリッパやら。

女 C 石切りのことやら。

女 D ずっとそばにいるから。

女 B だからね。

女 C いなくなるけど。

女 D あんたは生きて。

男 想像してみて。

女 C ろくでもない世の中になって行ってしまいうんかも知れんけど。

女 D あんたが生きてたら、あたしたちもね。

男 だから、想像してみて。想像すれば世界は変容するかも知れない。この小さな世界からもう少し大きな世界へ。想像すれば、世界は変わる。

女 D あんたは一人じゃないから。

女 B あたしたちがいて。

女 C 生きて、その子供たちがいて。

女 D さらにその子供たちがいる。血なんか繋がってなくてもいいの。生きて、生きたことを証としたらいい。その証

が家族を作って、そしたら又、誰かが想像する。

男 誰かが想像する小さな世界。

女 A あたし、

男 時間だ。

カチカチと言う時計の音。

女 B ほら、あそこ。

女 C ああ、そうね。

女 D あ、ほら、何か落ちて来た。

顔を覆う女 A。キーンと言うノイズの音。

女 A、ゆっくりと周りを見渡すと、女 B・C・D、男はいなくなっている。

女 A 例えば、ここを。：例えば、ここを。：例えば、ここを。
(ト、眩きながら、ここをどこかに定めようとしている)

女 A、ここをある場所に定める。柔らかな朝の光りが舞台を包む。女 C が舞台の上にあがり自分の位置を確保して、ぼんやりと遠くを眺める。女 B が舞台上にあがって来る。

女 B おはよ。

女 C うん。

女 B 何？何か見えるの？

女 C うん。

女 B 何よ。

女 B は女 C のそばに寄り、同じように遠くを眺める。

女 B ふーん。

女 C うん。(ト、微笑んでいる)

女 D が舞台の上にあがる。

女 D ちょっと、あんたたち、起きとるんやったら、少しは手伝ってや、ホンマに。：何？何か見えるん？

女 B・C うん。

女 D 何？

女 D も女 B・C の側によって座って、同じよう

に遠くを眺める。

女 D ふーん。
女 B・C うん。

男が舞台にあがる。

おしまい

ゆっくりとうなずく4人。
家族は朝日に包まれ、一日が始まる。

男 おはよ。

女 B・C・D おはよー。

男 どうしたの？皆で。

女 B・C・D うん。

男 何か、面白いもんでも見える？

女 B・C・D うん。
男 何？

男も並んで座る。

男 ふーん。

4人は優しく遠くを眺める。

女 A が現れ、舞台上にあがる。

女 A おはよう。

4人は反応しない。

女 A は4人の視線の先にあるものを見ようとゆっくりと動いていく。そして少し離れた所から同じ風景を眺める。

女 A 今日も暑くなりそうだねえ。